

2月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

平昌五輪の話題に終始した2月であった。純粋な冬季スポーツの競技に対する話題のみならず、北朝鮮問題がからまる「スポーツと政治」、そしてテレビ局のご都合による競技時間の不自然さの「スポーツとコマーシャリズム」の問題についても色々考えさせられた五輪だった。そんな中で日本選手団の活躍を支えた外国人コーチの存在については、まだまだ日本の指導者レベルの低さをバスケットボール界とだぶらせて「そだねー！」。

1・読書から

◆「“できるだけ” なにかをおこなうという態度は事に当たって初めからすでに誘惑に屈していることになります」〈ガンディー著『ガンディー 獄中からの手紙』岩波文庫〉

獄中にありながらも同志に対するメッセージを送り続けるガンディーの強さには畏れ入る。常に不退転の心意気で行動を起こす。“できるだけ”の逃げ道を断つ決意を。

◆「あなたは怖れている禍いよりももっと恐ろしい禍い、禍いを恐れる怖れに陥っているのです」〈『人類の知的遺残⑩アウグスティヌス』講談社〉

病気になることを恐れて色々な数値に一喜一憂する高齢者になってはいけない。どうなるかわからない未来に神経をすり減らす前に、今、目前に横たわる色々な困難を克服し、課題を達成することに全力を尽くそう。毎日与えられる「閑暇様」に感謝しながら。病気になっても「病人」にならないような「好齢者」でありたい。

◆「選手はコーチが自分に気遣ってくれていることに気づくまで、コーチが自分のことをどの程度わかっているのか気につけない」〈ジェフ・ジャンセン著『最強をめざすチームビルディング』大修館書店〉

選手はコーチが思っているほど思っていない。勘違い、順序違いをしてはいけない。コーチは選手に対して永遠の片思いであることを覚悟しなければならない。そういえば孫も選手と同じ。最後は爺より婆である。もちろん押しつけの気遣い、愛情はご法度だ。

2・新聞のコラム等から

◆「深いつもりで 浅いのが知恵 浅いつもりで 深いのが欲」〈朝日・折々のことば〉

京都のある製茶園で使われている「つもり十訓」の中の一節。コーチについての言い回し「知っているつもりで 知らないのがバスケットボール」。常に謙虚であること。ジャンプ女子の大本命高梨沙羅も「まだ金メダルを取る器じゃないことがわかった」と。

◆「今日も、明日も、明後日も、順調に問題だらけ」〈朝日・折々のことば〉

幸せと言うのはもめごとがないということではなく、それを解決する過程で実になることが生まれることを実感できることである。もめごとに正面から向き合い、解決していくコーチの後ろ姿を選手は常に注視している。

◆「自分がやりたいことを何でもやってください。私は両方選びたいと思いました」〈朝日・平昌五輪・エステル・レデッカ選手〉

五輪史上初のスキーとスノーボードで金メダリストの子どもたちへのメッセージ。この常識破りの怪物は「斜面を下るのはどちらも同じ」とのたまう。それなら「目標を掲げて努力するのはどちらも同じ」と勉強とバスケットボールの両立も指導できる。